

1993年度平城宮跡・平城京跡出土木簡

平城宮跡発掘調査部

1993年度の調査では、平城宮跡の3カ所、及び平城京跡の2カ所から、計138点(うち削屑65点)の木簡が出土した。その概要は既に『平城宮発掘調査出土木簡概報』(29)で報告したので、ここでは主要なものを紹介することとする。

造酒司地区(第241次調査) 内裏の東、東院の北西にあたるこの地区では、第22次調査で500点以上の木簡が出土し、伴出した「造酒」「酢」などと記した墨書土器の内容をも鑑み、ここを造酒司跡と推定した(『平城宮木簡』2 解説)。今回は45点(うち削屑9点)の木簡が出土した。内訳は、第22次調査区から南流する溝SD3035・SD3050からそれぞれ34点(うち削屑7点)・8点(うち削屑2点)、六角形の平面プランの井戸屋形を持つ井戸SE15800の埋土から1点、この井戸から南流し西に折れてSD3050に注ぐ溝SD15820から1点、そして井戸の西側に建つ7間×4間の東西廂付き南北棟建物SB3011の柱抜取穴から1点である。

木簡の内容は既往の知見を裏付けるものといえ、「酒米」「赤米」「赤春米」など酒の醸造用の米の荷札が多いのが特徴である。⑪の「京上」の語は初見である。なお、今回のSD3035出土木簡の年紀は和銅(⑨)、霊亀(⑦)と古いが、郷里制や郷制のものもあり、また第22次調査では天平勝宝8歳の年紀をもつものも出土しているので、この溝を東のSD3050に付け替えた時期は奈良時代後半以降に降る。

東院地区(第243・245-1次調査) 宇奈多理神社の南から南西にかけての地域の調査で、木簡は78点(うち削屑48点)出土した。内訳は、D期(天平神護～神護景雲)の井戸SE16030の掘形から削屑1点、及び同井戸から南流する石組溝SD16040から59点(うち削屑47点)のほか、SE16030の井戸枠20枚のうち18枚に墨書があった。

⑬は大伴門の警備に携わる門部の食料支給の木簡か。但し、朱雀門の別称と言われる大伴門に関わる木簡が東院地区から出土したことの意味については後考をまちたい。今回出土した木簡には東院と直接関わるようなものは見出せない。なお、郷里制の荷札(⑭)や天平宝字3年10月に「忌寸」という表記に統一される以前の姓の表記「伊美吉」(⑮)が見えるなど、遺構の想定年代より若干遡る木簡も含まれている。

SE16030の井戸枠は幅20cm厚さ10cmほどの桧の板材で、墨書は外面ないし側面(両方のものや両側面のものもある)の下部に「本」と記されており、材の天地を示すためのものと考えられる。「本」の他に、「隠」「墨」「綴」「鑿」などの落書のあるものが3点ある。⑰はそのうちの一つである。

東院庭園地区(第245-2次調査) 東院庭園北側と東面大垣周辺の調査で、木簡は計12点(うち削屑8点)出土した。内訳は、東面大垣の西雨落溝の側石の抜取穴SK16308から1点、同雨落溝に先行する南北溝SD16300から11点(うち削屑8点)である。

⑲の召文に「朱雀門」の語が見えるのが注意される。召喚する人ごとに注記を付す記載様式も珍しい。⑳は狩りに参加した官人の名を書き上げた木簡か。

平城宮東辺地区(第242-13次) 平城宮東辺の東二坊坊間路東側溝想定位置で検出した大規模な南北溝SD15793(幅7m、深さ1.8m)から、「日□」と読める081型式の木簡1点出土した。なお、溝自体は中世まで存続する。

薬師寺旧境内(第242-7次) 西僧坊の北約130m、平城京の条坊では右京六条二坊十五坪にあたる地域の調査で、木簡は東西溝SD501から2点出土した。うち1点は019型式で「彦五郎」と読め、伴出遺物や内容からみて近世の木簡であろう。
(渡辺晃宏)

